

## ■ リバティおおさか 第59回特別展 島崎藤村『破戒』100年

今年は島崎藤村初の書き下ろし小説『破戒』が出版されて、100年となります。この小説は、主人公である被差別部落出身青年の苦悩やさまざまな出来事を描いたものです。出版当初から今日まで大きな議論を巻き起こしてきた本書の影響力は、映画化や演劇化されるなど絶大なものでありました。

本展は『破戒』出版の100年を記念し、その意味を藤村の文学世界や他の文芸作品などを通して考えようとするものです。

展示構成

- I 島崎藤村の文学…遺品、原稿類など
  - II 小説『破戒』の世界
    - (1) 『破戒』成立史…『破戒』初版など
    - (2) 『破戒』とモデル…アルバムなど
    - (3) 『破戒』と部落問題…生活資料など
  - III 小説『破戒』の波紋
    - (1) 批評・論争史…原典、新聞記事など
    - (2) 『破戒』の映画・演劇・ドラマ化…脚本、チラシなど
  - IV 部落問題の文芸…パネル、原典など
- ※その他関連事業あり、詳しくは下記までお問い合わせください。



島崎藤村(1872~1943)

- 期間** 9月12日(火)～11月12日(日) 午前10時～午後5時(入館は午後4時半まで)
- 休館日** 毎週月曜日(祝日除く)、毎月第4金曜日、祝日の翌日(日曜除く)
- 入館料** 大人500円(400円)、大・高生300円(200円)、  
中学生以下・65歳以上・障害のある人(介助者含む)は無料 ※( )内は20人以上団体料金
- 問合せ** 〒556-0026 大阪市浪速区浪速西3-6-36 大阪人権博物館  
TEL:06-6561-5891 FAX:06-6561-5995 <http://www.liberty.or.jp/>

### 『破戒』出版100年にあたって思うこと

村井 茂さん(財団法人大阪府人権協会 専務理事)

小説『破戒』の主人公である被差別部落出身の青年教師丑松は、父親から出自を隠せと強く戒められていたにもかかわらず、「隠す」とこと「あらわす」との狭間で悩み苦しみます。丑松の葛藤であるこの隠すのか顕すのかというテーマは、小説全編の背骨ともなっています。「隠す」には、不当な差別から身を守りたいという気持ちがあり、「あらわす」には、差別の外圧のために自己抑圧している苦しみから自身を解放したいと願う心があります。どちらも差別への怒りが根底にあるのは当然です。

本年は、島崎藤村がこの『破戒』を自費出版して100年にあたります。10年一昔と言いますが、その10倍の時が流れました。では、丑松が苦悩したような自我の葛藤に苦しむ人びとは、もういなくなったのでしょうか？ 小説が書かれた(1897年～1906年)明治30年代の状況とは当然に大きく変わりましたが、なお終わりを告げてはいません。『破戒』100年にあたって、改めてこのことに思いを馳せないわけにはいきません。

しかし、前進しました。その前進をもたらした力は、他にもなく、隠すのではなく顕すという精神に基づく運動でした。部落解放運動は、「寝た子を起すな」という考えや差別から逃げる考えや生き様を批判・克服して、差別の状況の変革を勝ち取ってきたのです。

部落差別が現存するなかで、差別や排除、不利益を被る不安を抱きながらも、同和地区出身者が自らの立場を語る(あらわす)のは、差別を克服した新しい関係を築こうとする行動です。それは、被差別当事者が新しい自分になろうとする(差別と闘おうとする)自己変革であると同時に、これに応え、つながってくれる仲間を発見し、反差別の集団をつくりだしていく希望を抱いた行動でもあるのです。

私は、社会の差別の圧力の存在によって、自分自身を抑圧してし

まう姿(差別がもたらす深い心の傷跡)こそ、厳しい差別の現実そのものであると思います。この差別の現実を克服する「人権戦略」は、外側からの不当な抑圧と同じ方向で、自ら自分自身を抑圧してしまう「隠しの戦略」ではなく、自身を内的な抑圧から解放する「誇りの戦略」でなくてはならないと思っています。自らを解放する「誇り」(自己のアイデンティティを大切にすること)は、差別のまなざしを真っ向から跳ね返す力強さを持つに違いありません。

いま、内閣同和对策審議会答申(1965年)が「超えがたい壁」と述べた、結婚の際の差別の壁が崩され始めています。同和地区内外の青年たちが、差別を体験しながら、苦しみながらもそれと闘って大きく前進してきているのです。この前進は、差別を潜在化させずに、差別の不当性を正面からみすえてきたが故に育ってきた、差別を乗り越える同和地区内外の確かな連帯のパワーによるところが大きいと考えます。

ところで、『破戒』といえば、青年の頃に市川崑監督・市川雷蔵主演の映画を深夜に一人で家のテレビで見た時のことも思い出します。雷蔵演じる(隠す)丑松と、三国連太郎演じる部落解放運動家である(あらわす)猪子蓮太郎との対話の場面は、私には特に印象深いものでした。そして、終わりの方のシーンで、猪子の妻が、「人が噂するなら、させておきなさい。噂だけのことでしょもの。人が面と向かってあなたは部落民かと聞いたら、そうだと答えなさい。嘘をつくにはあたりませんもの・・・」というようなことを丑松に語った場面も忘れられない。強さと柔らかさが調和した言葉ですが、教育環境に恵まれて育った、因習に立ち向かうあたらしい女性の毅然とした姿がそこにありました。